



故 今村仁司教授遺影



## 今村仁司教授追悼号の発刊に寄せて

今村仁司先生は2007年5月5日に永い眠りに就かれました。今年度、国内研究員としての研究生活に入られてから、およそ1ヵ月後のことでした。今村先生没すの第一報を村上学長から受けた瞬間、私は、すぐには事態が飲み込めませんでした。ややあって去来したのは、来るべき時が来てしまったという思いでした。事情をあまり知っていなかった本学の同僚の多くにとっては、先生の訃報は、おそらく晴天の霹靂だったのではないのでしょうか。

私が今村先生からご自身の置かれている状況についてのメールを受け取ったのは、2006年4月初頭のことでした。学部長に就任したばかりの私は、大先輩からいただいたメールの「学部長 安川先生」という名宛ての表記に、少しくすぐったさを感じつつも、読み進めるにつれ、次第に重苦しい気持ちに陥りました。ここに詳しく載録することはできませんが、メールの主旨は、体調が思わしくなく、授業担当だけはこなすけれども、それ以外の校務は容赦願いたいということでした。そしてそのことを学長にも知らせたいということでした。このメールのこともあり、私は折に触れて今村先生のことを想いました。しかし、以前とは違って、先生をキャンパス内でお見かけすることはほとんど無くなってしまい、ご様子をうかがう機会はなかなか持てませんでした。今思うと、こちらから先生の研究室にお邪魔してでもうかがうべきだったかもしれません。私が先生とようやくお話しできたのは、メールをいただいてから半年以上後のことでした。次年度の授業計画についてのご意向をお聞きすることが主な用件のあまり長くない会見でしたが、その時の印象は今も鮮明に残っています。私は先生の見違えるような瘦躯に事態の深刻さを察せずにはられませんでした。私が先生のお姿を拝見したのは、まことに残念ながら、それが最後です。

今村先生は、1971年4月に本学に着任されました。ご逝去の時点で、在職期間は約36年、経済学部で最古参の教員になられていました。ご着任当初の担当科目は「社会思想史」で、80年代になって、一般教養科目の「社会科学概論」も交替で担当されるようになり、さらに、何度かのカリキュラム改革を経て、近年では、「経済哲学」を主担当科目とされていました。このたび、この追悼文を準備するにあたり、71年度以来の経済学部の『講義概要』を繙いて知ったことですが、今村先生は、同じ科目を連続で担当された場合でも、同一の講義表題で授業を行われたことは、晩年の数年間を例外として、ほとんどありません。ご着任当初こそ比較的標準的な近代西洋社会思想の通史を軸に工夫をしていらしたようですが、数年後からは、ご自身のその時々の研究テーマに基づいた授業をされているのです。75年に最初の単行著作である『歴史と認識』を出版されたことと、同年から2ヵ年にわたってフランスで国外研究生活を送られたことが転機となったようです。以後の講義表題を並べると、おそらくこの巻頭言に続いて掲載されている著作目録とかなりの程度一致するのではないのでしょうか。

今村仁司教授追悼号の発刊に寄せて

今村先生の研究上のご業績については多言を要さないでしょう。改めて申すまでもなく、今村先生は現代の日本を代表する思想家であり、社会哲学者でありました。アルチュセールを媒介としたマルクス主義批判から出発し、フランスを中心とした西洋現代思想に関する膨大な研究を発表され、従来の思想のあり方を根元的に問い直そうとするいわゆるポストモダンの旗手としての地位を不動のものにされました。先生のご関心は、しかし、西洋思想の枠にとどまらず、ご自身の滞在記を基にされたタイや中国に関する論考、さらにはイスラーム経済論に至る非西洋世界を対象としたお仕事も多数発表されています。晩年には、日本の仏教思想に接近され、清沢満之を題材とした著作を多数発表されました。私は、必ずしも先生のお書きになったものの熱心な読者であるわけではありませんが、思うに、先生が取り上げられた古今東西の思想は、おそらく先生ご自身の思想を表現するための触媒だったのではありますまいか。その意味では、初期の2著『労働のオントロジー』、『暴力のオントロジー』は、思想家今村仁司を理解するための重要な鍵と言えるような気がします。

本学は、今村先生の思想界、哲学界におけるご業績を偲び、2007年10月27日に「現代における社会と文化の理論を求めて」と題した記念シンポジウムを開催しました。今村先生とご親交を結ばれていた5人の碩学にご報告いただき、討論を含めて、全体で4時間半に及ぶ充実した学術的な催しになりました。その成果は、近い将来に、本学の学術研究センターから刊行される予定になっています。

この追悼号もまた記念シンポジウムと同様の趣旨で編まれたものです。刊行にあたっては、学内外の多くの方々のご力作をお寄せくださいました。寄稿者の皆様にはここに篤く御礼申し上げます。本号は、シンポジウムの報告書とともに、今村先生のご業績を永く顕彰することになることでしょう。

今村先生の遺されたものの偉大さを思えば思うほどに、そのご逝去は私たちにとって計り知れない損失であり、まことに痛惜の念に耐えません。謹んで哀悼の意を表するとともに、先生のご冥福をお祈りいたします。

2007年12月31日

経済学部長 安川隆司

# 故 今村仁司教授年譜ならびに主要著作目録

## 略 歴

1942年 2月 26日 岐阜県で生まれる

## 学 歴

1960年 3月 岐阜県立岐阜高等学校卒業  
1965年 3月 京都大学経済学部経済学科卒業（経済学士）  
1967年 3月 京都大学大学院経済学研究科修士課程修了（経済学修士）  
1971年 3月 京都大学大学院経済学研究科博士課程単位取得

## 職 歴

1971年 4月 東京経済大学経済学部専任講師（～1974年 3月）  
1974年 4月 東京経済大学経済学部助教授（～1983年 3月）  
1975年 4月 長期国外研究員（フランス：1975年 7月～1977年 7月）  
1983年 4月 東京経済大学経済学部教授（～2007年 5月）  
1985年 4月 東京経済大学大学院経済学研究科主任（～1987年 3月）  
1988年 4月 対外経済貿易大学派遣教員（1988年 9月～1989年 2月）  
1990年 4月 国内研究員（～1991年 3月）  
2007年 4月 国内研究員（～2007年 5月）

## 業績目録

### I. 著作（単著・共著）[\*：共著]

- 70年代 1975 『歴史と認識——アルチュセールを読む』新評論  
(改題増補版：『アルチュセールの思想——歴史と認識』講談社学術文庫, 1993)
- 80年代 1980 『アルチュセール——人と思想』清水書院  
1981 『労働のオントロジー』勁草書房  
1982 『暴力のオントロジー』勁草書房  
\* 『シミュレーションの時代（ボードリヤール日本で語る）』（ボードリヤール・フォーラム編, 宇波彰・丸山圭三郎・宮島喬ほかとの共著）JICC 出版局  
1983 『批判への意志』冬樹社（勁草書房版：1987）  
(改題増補版：『現代思想の展開』講談社学術文庫, 1995)  
『社会科学批評』国文社  
\* 『社会科学の変換を求めて——<経済学>批判を中心に』（栗本慎一郎・吾郷健二・室田武・柄谷行人との共著）現代企画室  
1985 『排除の構造——力の一般経済序説』青土社（ちくま学芸文庫版：1992）  
『現代思想のキイ・ワード』講談社現代新書  
(増補版：『増補 現代思想のキイ・ワード』ちくま文庫, 2006年)  
1986 『現代思想の系譜学』筑摩書房（ちくま学芸文庫版：1993）  
\* 『非国民の作り方——現代いじめ考』（赤塚行雄ほかとの共著）潮出版社  
1987 『思想の現在——実存主義・構造主義・ポスト構造主義』河合文化教育研究所  
『思想の星座』（聞き手：高橋順一）洋泉社  
1988 『仕事』弘文堂  
1989 『精神の政治学——作る精神とは何か』福武書店
- 90年代 1990 『理性と権力——生産主義的理性批判の試み』勁草書房  
『作ると考える——受容的理性に向けて』講談社現代新書  
1992 『現代思想の基礎理論』講談社学術文庫  
1993 『タイで考える』青土社  
1994 『近代性の構造——「企て」から「試み」へ』講談社選書メチエ  
(ハングル訳版：『近代性の構造』李洙正/訳, ミノン社, 1999)

- 『中国で考える』 青土社  
 『貨幣とは何だろうか』 ちくま新書
- 1995 『ベンヤミンの〈問い〉——「目覚め」の歴史哲学』 講談社選書メチエ
- 1996 『群集——モンスターの誕生』 ちくま新書  
 『「大菩薩峠」を読む——峠の旅人』 ちくま新書
- \* 『現代思想の源流——マルクス・ニーチェ・フロイト・フッサール』  
 (『現代思想の冒険者たち』第00巻) (三島憲一・鷺田清一・野家啓一との共著) 講談社
- 1997 『アルチュセール——認識論的切断』 (『現代思想の冒険者たち』第22巻) 講談社  
 (文庫版: 『アルチュセール全哲学』 講談社学術文庫, 2007)
- 1998 『近代の思想構造——世界像・時間意識・労働』 人文書院  
 『近代の労働観』 岩波新書
- 1999 \* 『フーコー——人と思想』 (栗原仁との共著) 清水書院
- 00年代 2000 『交易する人間 (ホモ・コムニクス)——贈与と交換の人間学』 講談社  
 選書メチエ  
 『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』 岩波現代文庫
- 2003 『清沢満之の思想』 人文書院
- \* 『清沢満之における哲学と宗教——清沢満之100回忌記念シンポジウム』  
 (寺川俊昭・長谷正當・安富信哉との共著), 大谷大学
- 2004 『清沢満之と哲学』 岩波書店
- \* 『人間に生まれて——清沢満之先生百周年記念』 (延塚知道・児玉暁洋との共著) 崇信学舎
- 2005 『抗争する人間 (ホモ・ポレミクス)』 講談社選書メチエ  
 『マルクス入門』 ちくま新書
- 2007 \* 『儀礼のオントロジー』 (今村真介との共著) 講談社  
 『社会性の哲学』 岩波書店

## II. 編著 (編著・編訳等)

- 80年代 1986 『ワードマップ資本主義』 新曜社  
 1987 『老いの様式——その現代的省察』 (多田富雄との共編) 誠信書房  
 1988 『現代思想を読む事典』 講談社
- 90年代 1991 『格闘する現代思想——トランスモダンへの試み』 講談社現代新書  
 1992 『トランスモダンの作法』 リプロポート

故 今村仁司教授年譜ならびに主要著作目録

- 1994 『現代思想ピープル 101』 新書館
- 1996-97 『廣松渉著作集』（高橋洋児・吉田憲夫・佐々木力・村田純一・野家啓一との共編）全 16 巻，岩波書店
- 1996-99 『現代思想の冒険者たち』（三島憲一・鷺田清一・野家啓一との共編）全 31 巻，講談社
- 00 年代 2001 『思想読本マルクス』 作品社
- 2002-03 『清沢満之全集』（小川一乗・寺川俊昭・久木幸男・小野蓮明・神戸和磨・安富信哉・延塚知道・池上哲司・須藤訓任・友田孝興・沙加戸弘との共編）全 9 巻，岩波書店
- 2004 『知の教科書ヘーゲル』（座小田豊との共編），講談社選書メチエ
- 2005- 『マルクス・コレクション』（三島憲一との共編）全 7 巻，筑摩書房

#### <監修シリーズ>

- 1986-92 叢書「トラヴェルス (Traverses)」全 6 巻，リプロポート
- 1986 『化粧』（ジャン・ボードリヤールほか編）
- 1988 『デザイン』（ジャン・ボードリヤールほか編）  
『声』（ジャン・ボードリヤールほか編）
- 1989 『恐怖』（ジャン・ボードリヤールほか編）
- 1990 『ニッポン』（ジャン・ボードリヤールほか編）
- 1992 『世紀末の政治』（ジャン・ボードリヤールほか編）

### Ⅲ. 訳書

- 70 年代 1970 アンリ・ルフェーヴル「マルクスの新たな読み方のための提案」，河野健二監訳『若きマルクスと現代』合同出版，所収  
イリング・フェッチャー「若きマルクスにおける自由観の具体化」，河野健二監訳『若きマルクスと現代』合同出版，所収
- 1976 ジェルジ・マルクシュ『マルクス主義と人間学』（高橋洋児・良知力との共訳）河書房新社
- 1979 エティエンヌ・バリバル『史的唯物論研究』新評論
- 1979 ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』（塚原史との共訳）紀伊國屋書店
- 80 年代 1980 モーリス・ゴドリエ『経済人類学序説』日本ブリタニカ
- 1981 ジャン・ボードリヤール『生産の鏡』（宇波彰との共訳）法政大学出版局
- 1982 ジャン・ボードリヤール『象徴交換と死』（塚原史との共訳）筑摩書房



(ちくま学芸文庫版：1992)

- 1982 ジャン・ボードリヤール『記号の経済学批判』（宇波彰・桜井哲夫との共訳）法政大学出版局
- 1983 エティエンヌ・バリバル「マルクス主義の危機 —— マルクス主義の現代的意義」、『思想』No.705, 3月
- 1984 モーリス・ゴドリエ『経済における合理性と非合理性』国文社  
 コルネリユウス・カストリアディス「迷路の十字路」、『理想』No.615, 8月
- 1985 マイケル・ライアン『デリダとマルクス』（港道隆・中村秀一との共訳）  
 勁草書房
- 1987 ジャン＝フランソワ・リオタール『漂流の思想 —— マルクスとフロイトからの漂流』（塚原史・下川茂との共訳）国文社  
 『叢書知のパサージュ3 交差する科学知』（生方淳子との共訳）ユニテ  
 『叢書知のパサージュ1 哲学のポスト・モダン』（監訳）ユニテ
- 1988 ピエール・ブルデュ『実践感覚1』（港道隆との共訳）みすず書房  
 ジャン＝リュック・プチ『労働の現象学』（松島哲久との共訳）法政大学出版局  
 テリー・イーグルトン『ワルター・ベンヤミン』（有満麻美子・高井宏子との共訳）勁草書房
- 1989 ジャック・ピデ『資本論をどう読むか』（竹永進・山田鋭夫・海老塚明との共訳）法政大学出版局  
 マーティン・ジェイ『永遠の亡命者たち —— 知識人の移住と思想の運命』（藤澤賢一郎・竹村喜一郎・笹田直人との共訳）新曜社  
 ウェインライトほか『断片を超えて —— フェミニズムと社会主義』（沢田美沙子・坂上桂子との共訳）勁草書房
- 90年代 1990 ピエール・ブルデュ『実践感覚2』（港道隆と共訳）みすず書房
- 1993 マーティン・ジェイ『マルクス主義と全体性』（荒川幾男・江原由美子・森反章夫・山本耕一・三浦直枝・宇都宮京子・浅井美智子・谷徹・桜井哲夫・大庭優との共訳）国文社  
 シモーヌ・ドゥブー『フーリエのユートピア』（堅田研一・中村典子・大谷遊介・勝田千恵子・安川慶治との共訳）平凡社  
 ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論1』（三島憲一・大貫敦子・高橋順一・塚原史・村岡晋一・山本尤・横張誠・与謝野文子との共訳）岩波書店（岩波現代文庫版：2003）  
 ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論4』（三島憲一・大貫敦子・高橋順

- 一・塚原史・村岡晋一・山本尤・横張誠・与謝野文子との共訳）岩波書店（岩波現代文庫版：2003）
- 1994 ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論3』（三島憲一・大貫敦子・高橋順一・塚原史・村岡晋一・山本尤・横張誠・与謝野文子との共訳）岩波書店（岩波現代文庫版：2003）
- 1995 ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論2』（三島憲一・大貫敦子・高橋順一・塚原史・吉村和明・村岡晋一・山本尤・横張誠・与謝野文子・細見和之との共訳）岩波書店（岩波現代文庫版：2003）
- ルイ・アルチュセール『哲学について』筑摩書房
- ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論5』（三島憲一・大貫敦子・高橋順一・塚原史・吉村和明・村岡晋一・山本尤・横張誠・与謝野文子・細見和之との共訳）岩波書店（岩波現代文庫版：2003）
- 1996 アレクサンドル・コジューヴ『法の現象学』（堅田研一との共訳）法政大学出版社
- ルイ・アルチュセールほか『資本論を読む』全3巻，ちくま学芸文庫
- 1997 ジャン＝ジャック・ルセルクル『現代思想で読むフランケンシュタイン』（沢里岳史と共訳）講談社
- 1997 マーティン・ジェイ『世紀末社会主義』（大谷遊介との共訳）法政大学出版社
- 1998 ヤン・ムーリエ・ブータン『アルチュセール伝 —— 思想の形成（1918-1956）』（塚原史・谷昌親・吉本素子・下沢和義との共訳）筑摩書房
- 00年代 2001 『清沢満之語録 —— 現代語訳』岩波現代文庫
- 2005 カール・マルクス『資本論（上・下）』（「マルクス・コレクション」4・5）（三島憲一・鈴木直との共訳）筑摩書房
- カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日ほか』（「マルクス・コレクション」3）（横張誠・木前利秋との共訳）筑摩書房
- 2007 カール・マルクス『時局論（下）芸術・文学論：手紙』（「マルクス・コレクション」7）（村岡晋一・小須田健・吉田達・瀬嶋貞徳との共訳）筑摩書房
- ジョルジュ・ソレル『暴力論』（上）（下）（塚原史との共訳）岩波文庫

#### IV. 論文

- \* 1 雑誌・紀要等に掲載された論文を主とし，対談や新聞への寄稿文等は割愛した。
- \* 2 ただし，論文以外にも，雑誌掲載の長い書評論稿及び学術エッセイ・講演記録を

含めた。また談話をまとめたものも、本人が手を入れた論説となっているため含めている。

- 60年代 1969 「マルクスの資本主義像と歴史意識 —— 1850年代の時事論文を中心にし  
て」, 『経済論叢』(京都大学経済学会) Vol.103 (No.4), 1969年4月
- 70年代 1971 「マルクス歴史理論の形成とフランス史分析-1-」, 『人文学報』(京都大学  
人文科学研究所) No.32, 1971年3月  
「48年2月革命とマルクス歴史理論」, 『東京経学会誌』(東京経済大学)  
No.72, 1971年5月
- 1972 「『資本論を読む』評注」, 『京大新聞』1972年4月24日-5月1日号  
「アルチュセールと思想史=科学史の問題」, 『京大新聞』1972年5月15  
日-5月22日号  
「アルチュセールにおける歴史と弁証法」, 『思想』(岩波書店) No.573,  
1972年3月  
「Louis Althusser, Etienne Balibar : Lire le Capital Tome 1, 2, 1968.」, 『季  
刊社会思想』(社会思想社) Vol.2, No.1, 1972年5月  
「『経済』範疇と生産様式概念」, 『東京経学会誌』No.78, 1972年9月
- 1973 「アルチュセールとマルクス主義哲学 —— アルチュセール・ルイス論争  
にふれて」, 『現代思想』(青土社) 1973年9月号
- 1974 「アルチュセールと認識論」, 『現代思想』1974年1月号  
「歴史と認識」, 『現代思想』1974年2月号  
「フェティシズム論について —— コントとマルクス」, 『情況』(情況出版)  
1974年5月号  
「ルイ・アルチュセール」, 『現代の理論』(現代の理論社) Vol.11 (No.5) ,  
1974年5月  
「マルクスの再生と認識論的研究」, 『京大新聞』1974年7月1日号  
「自然史の哲学と幻想」, 『現代思想』1974年10月号  
「プルドンの歴史観」, 河野健二編『プルドン研究』岩波書店, 1974  
「マルクスの歴史理論 —— 市民社会論と階級形成論」, 『情況』1974年12  
月号
- 1975 「人間的自然の構造」, 『現代思想』1975年3月号  
「コントとマルクス」, 『現代思想』1975年4月号
- 1976 「パリは燃えているか? —— フランスにおける<学校>問題とその現  
実」, 『情況』1976年8月号  
「暑いパリ」, 『情況』1976年9月号

故 今村仁司教授年譜ならびに主要著作目録

- 1978 「アルチュセール（フランスのマルクス研究1）」、『現代思想』1978年1月号  
「アルチュセール（フランスのマルクス研究2）」、『現代思想』1978年2月号  
「カストリアディスの社会哲学（フランスのマルクス研究3）」、『現代思想』1978年4月号  
「マルクスの思想——その可能性について」、『現代思想』1978年5月号  
「カストリアディスの社会哲学（二）（フランスのマルクス研究4）」、『現代思想』1978年6月号  
「シュンペーター」「アルチュセール」（総特集「現代思想の109人」のうち二人担当）、『現代思想』6月臨時増刊号，1978年6月  
「カストリアディスの社会哲学（三）（フランスのマルクス研究5）」、『現代思想』1978年7月号  
「カストリアディスの社会哲学（四）（フランスのマルクス研究6）」、『現代思想』1978年8月号  
「アルチュセール批判の試み」、『社会科学の方法』（御茶の水書房）第8号，1978年  
「マルクス主義哲学の死と実現——L. アルチュセールの場合」、『理想』（理想社）No.544，1978年9月  
「構造主義の可能性」、『経済評論』（日本評論社）1978年9月号  
「カストリアディスの社会哲学（五）（フランスのマルクス研究7）」、『現代思想』1978年10月号  
「ミシェル・アンリのマルクス論（フランスのマルクス研究8）」、『現代思想』1978年11月号  
「マルクス研究の新動向」、『経済学史学会年報』（経済学史学会）No.16，1978年11月  
「ミシェル・アンリのマルクス論（二）（フランスのマルクス研究9）」、『現代思想』1978年12月号  
1979 「ミシェル・アンリのマルクス論（三）（フランスのマルクス研究・完結）」、『現代思想』1979年2月号  
「現代フランス思想のひとこま」、『創文』（創文社）1979年2月号  
「ルイ・アルチュセール」、『現代思想』1979年12月号  
80年代 1980 「労働と快楽」、『現代思想』1980年1月号  
「報告 Louis Althusser に就いて」（第4回社会思想史学会大会記録——

- マルクス主義思想の現段階), 『社会思想史研究』(北樹出版) No.4, 1980
- 「森川喜美雄『プルドンとマルクス』」, 『社会科学年報』(専修大学社会科学研究所編/公人社) No.14, 1980年3月
- 「社会科学の考え方」, 『経済セミナー』(日本評論社) No.303, 1980年4月
- 「廣松渉」, 『現代思想』1980年12月号
- 1981 「構造主義の可能性」, 『経済評論』(日本評論社) Vol.30 (No.1), 1981年1月
- 「戦争状態論」, 『現代思想』1981年1月号
- 「神話と暴力(暴力とユートピアの社会哲学)」, 『現代思想』1981年2月号
- 「貨幣と暴力1」, 『現代思想』1981年3月号
- 「貨幣と暴力2」, 『現代思想』1981年4月号
- 「西欧形而上学批判と技術の思想 —— アクセロス著『技術の思想家マルクス』」, 『季刊クライシス』(社会評論社), No.7, 1981年春
- 「主と奴」, 『現代思想』1981年5月号
- 「経済人類学入門」, 『経済セミナー』No.316, 1981年5月
- 「労働の概念について —— 社会哲学的考察」, 『東京経大会誌』No.121, 1981年6月
- 「ラカンとアルチュセール」, 『現代思想』1981年7月臨時増刊号
- 「自己意識と暴力1」, 『現代思想』1981年8月号
- 「国家を拒否する社会」, 『現代思想』1981年9月号
- 「商品の記号論」, 山口昌男編『説き語り記号論』日本ブリタニカ, 1981年9月
- 「自己意識と暴力2」, 『現代思想』1981年10月号
- 「政治経済批評から社会批評へ」, 『経済評論』Vol.30 (No.10), 1981年10月
- 「人類学と社会哲学」, 『現代思想』(青土社)1981年11月号
- 「都市の逆ユートピア」, 『is』(ポーラ文化研究所), 1981年12月号
- 1982 「呪われた部分」, 『現代思想』1982年2月号
- 「認識論と記号論」, 『講座・記号論』第4巻, 勁草書房, 1982年2月
- 「消費社会の記号論」, 同上
- 「身体と暴力」, 『現代詩手帖』(思潮社) Vol.25 (No.4), 1982年4月
- 「ジラール」, 『現代思想』1982年8月号

故 今村仁司教授年譜ならびに主要著作目録

- 「構造主義革命とその限界」, 『理想』 No.592, 1982年9月  
「第三項排除効果1」, 『現代思想』 1982年9月号  
「第三項排除効果2」, 『現代思想』 1982年10月号  
「第三項排除効果3」, 『現代思想』 1982年11月号
- 1983 「労働と暴力」, 『インパクション』 第21号, 1983年1月15日号  
「マルクスの労働観」, 『別冊経済セミナー マルクス死後100年』 1983年2月  
「文化のなかの暴力」, 『東京経大会誌』 No.130 (故吉田静一教授追悼号), 1983年3月  
「非対象化労働論」, 『思想』 (岩波書店) No.705, 1983年3月  
「アルチュセール以後」, 『現代思想』 1983年3月号  
「現代の社会思想1 100年後のマルクス」, 『経済セミナー』 1983年4月号  
「現代の社会思想2 マルクスとジャック・デリダ」, 『経済セミナー』 1983年5月号  
「現代の社会思想3 スピノザかヘーゲルか」, 『経済セミナー』 1983年6月号  
「現代の社会思想4 群衆の時代」, 『経済セミナー』 1983年7月号  
「現代の社会思想5 ボードレールとベンヤミン」, 『経済セミナー』 1983年8月号  
「現代の社会思想6 暴力批判論」, 『経済セミナー』 1983年9月号  
「現代の社会思想7 ガザに盲いて」, 『経済セミナー』 1983年10月号  
「商品としての住居」, 『群居』 (群居刊行委員会) 創刊号, 1983年10月  
「現代の社会思想8 願望夢とユートピア」, 『経済セミナー』 1983年11月号  
「テキストと空白」, 『現代詩手帖』 (思潮社) Vol.26 (No.11), 1983年11月号  
「現代の社会思想9 山岳割拠とユートピア」, 『経済セミナー』 1983年12月号  
「労働と時間について」 (研究ノート・資料), 『東京経大会誌』 No.134, 1983年12月
- 1984 「現代の社会思想10 海上移民ユートピア」, 『経済セミナー』 1984年1月号  
「現代の社会思想11 解放的ノマディズム」, 『経済セミナー』 1984年2月号

号

- 「現代の社会思想 12 ノマドとしての机竜之介」, 『経済セミナー』1984年  
3月号
- 「現代の社会思想 13 ユートピアと暴力」, 『経済セミナー』1984年4月号  
「労働論の新生のために」, 『労働史研究』(論創社)創刊号, 1984年4月
- 「現代の社会思想 14 ドゥルーズとノマドロジー」, 『経済セミナー』1984  
年5月号
- 「労働概念の再検討 —— 社会哲学的考察」, 『日本労働協会雑誌』(日本労働  
協会) Vol.26 (No.4・5), 1984年5月
- 「第三項排除効果の構成契機 1 (力の一般経済序説)」, 『現代思想』1984年  
5月号
- 「ニーチェと現代フランス思想 1」, 『ニーチェ全集』(第2期)(白水社)  
第5巻「月報」1984年5月
- 「現代の社会思想 15 バタイユと思考の冒険」『経済セミナー』1984年6  
月号
- 「第三項排除効果の構成契機 2」, 『現代思想』1984年6月号
- 「ポップの理性のために」, 『現代思想』1984年6月号
- 「現代の社会思想 16 アドルノと否定弁証法」, 『経済セミナー』1984年7  
月号
- 「第三項排除効果の構成契機 3」, 『現代思想』1984年7月号
- 「現代の社会思想 17 カストリアディスと自律の思想」, 『経済セミナー』  
1984年8月号
- 「ニーチェと現代フランス思想 2」, 『ニーチェ全集』(第2期)(白水社)  
第6巻「月報」1984年8月
- 「哲学と暴力 —— 第三項の形成 1」, 『現代思想』1984年8月号
- 「ベンヤミンと林達夫」, 『現代思想』1984年8月号
- 「『のり超え』の流行」, 『本』(講談社)1984年8月号
- 「現代の社会思想 18 響きと怒り」, 『経済セミナー』1984年9月号
- 「全体化の理性 —— 第三項の形成 2」, 『現代思想』1984年9月号
- 「ドゥルーズからマルクスへ」, 『現代思想』1984年9月臨時増刊号
- 「近代と速度」, 『現代詩手帖』, 1984年9月号
- 「Un Sommaire des Manuscrits de Saint-Simon」(中村秀一と共著), 『東  
京経学会誌』No.137, 1984年9月
- 「現代の社会思想 19 音の暴力を許す社会」, 『経済セミナー』1984年10

月号

- 「全体化への挑戦 —— 第三項の形成 3」, 『現代思想』1984年10月号  
「現代の社会思想 20 苦境に立つ自由」, 『経済セミナー』1984年11月号  
「全体化への挑戦 (2) —— 第三項の形成 4」, 『現代思想』1984年11月号  
「ニーチェと現代フランス思想 3」, 『ニーチェ全集』(第2期)(白水社)  
第7巻「月報」1984年11月  
「現代の社会思想 21 儀礼と社会」, 『経済セミナー』1984年12月号  
「動的ファルマコン論」, 『現代思想』1984年12月号  
「浄化の儀礼的实践としてのエクリチュール『恐怖の権力』」, 『月刊ペン』  
(月刊ペン社)1984年12月号  
1985 「現代の社会思想 22 ホルクハイマーの遺言」, 『経済セミナー』1985年  
1月号  
「現代の社会思想 23 フーコーの仕事」, 『経済セミナー』1985年2月号  
「現代の社会思想 24 暴力と形而上学」, 『経済セミナー』1985年3月号  
「パリのせわしなさ (10年ぶりのパリ)」『現代思想』1985年3月号  
「人種差別」, 『現代思想』1985年4月号  
「経済学の衰退」, 『理想』No.623, 1985年4月  
「記号論への一つの招待」, 『書齋の窓』(有斐閣)1985年4月号  
「パリで人に会う」, 『現代思想』1985年5月号  
「破滅への願望」, 『ユリイカ』(青土社)1985年5月号  
「近代家族内の子供と老人」, 『現代思想』1985年6月号  
「フランクフルトの夜」, 『現代思想』1985年6月号  
「創発的知性」, 『現代思想』1985年7月号  
「暗いパリ」, 『現代思想』1985年8月号  
「エッセーの哲学者セール」, 『現代思想』1985年9月号  
「なつかしの日本館」, 『現代思想』1985年9月号  
「商業観の諸相」, 『現代思想』1985年10月号  
「退屈の効用」, 『現代思想』1985年11月号  
「ロラン・バルトによるフーリエ」, 『現代詩手帖』1985年12月号  
1986 「思想の晩年様式 —— 主観性の最後の輝き」, 『現代思想』1986年1月  
「思想の現状 (歩行と思索)」, 『現代思想』1986年1月号  
「支配と暴力」, 大森荘蔵ほか編『新・岩波講座哲学 11 社会と歴史』岩波  
書店, 1986年  
「現代ヨーロッパ思想への視点 —— ポスト構造主義の台頭が意味するも



- の], 『エコノミスト』(毎日新聞社) 1986年2月4日号  
「思想の現況」, 『別冊文藝——現代思想の饗宴』, 河出書房新社, 1986年3月  
「世界をテキストとして読む」, 現代新書編集部編『新聞をどう読むか』, 講談社, 1986年3月  
「出発(タイ日誌)」, 『現代思想』1986年7月号  
「チェンマイに向かう」, 『現代思想』1986年8月号  
「精神の政治学」, 『ちくま』(筑摩書房) 1986年8月号  
「儀礼調査へ駆け出す」, 『現代思想』1986年9月号  
「儀礼の現場」, 『現代思想』1986年10月号  
「チェンマイを観て回る」, 『現代思想』1986年11月号  
「タイの知識人」, 『現代思想』1986年12月号  
1987 「タイの学生たち」, 『現代思想』1987年1月号  
「女と子どもが支える経済」, 『現代思想』1987年2月号  
「調査から学んだこと」, 『現代思想』1987年3月号  
「新しいということ」, 『青年心理』(金子書房) 1987年3月号  
「Noise」, 『TBS調査情報』(TBS編成考査部発行) 1987年3月号  
「型通りの振舞い」, 『海燕』(福武書店) 1987年3月号  
Marxisme japonais et marxisme occidental (traduit du japonais par Fumi TSUKAHARA et Svetlana CHARKOFF), *Actuel Marx*, No2, l'Harmattan, Paris, 1987  
「他者を信用すること(談話のまとめ)」, 『現代思想』1987年8月号  
「アドルノの根本モチーフについて——自己保存論」, 『現代思想』1987年11月号  
「美と倫理」, 『ザ・トレンド88』(UPU) 1987年  
1988 「消費の概念」, 『RIRI流通産業』(流通産業研究所) 1988年5月号  
「死に直面する精神(談話のまとめ)」, 『現代思想』1988年8月号  
「中国滞在記-1」, 『現代思想』1988年12月号  
1989 「中国滞在記-2 現代中国の文化的課題」, 『現代思想』1989年1月号  
「中国滞在記-3 骨折養生記」, 『現代思想』1989年2月号  
「中国滞在記-4 現代中国学生気質」, 『現代思想』1989年3月号  
「中国滞在記-5 引っ越し騒動記」, 『現代思想』1989年4月号  
「中国滞在記-6 旅の印象-1 上海その他」, 『現代思想』1989年5月号

- 「文化階級論の射程（談話のまとめ）」、『現代思想』1989年5月号  
「中国滞在記-7- 旅の印象-2- 四川」、『現代思想』1989年6月号  
「中国滞在記-8- 旅の印象-3- 重慶, 大足, 成都」、『現代思想』1989年7月号  
「中国滞在記-9- 現代中国をどう見るか」、『現代思想』1989年8月号  
「中国滞在記-10 完- 「客体主義」について」、『現代思想』1989年9月号  
「天安門事件について」、『現代思想』1989年11月号
- 90年代 1990 「近代性の本質は労働にあり」、『現代思想』1990年4月号  
「二つの89年の意味を問う —— 「王」を産出する回路を超えるもの」,  
『情況』（情況出版）1990年7月号  
「アレクサンドル・コジェーヴについて」、『群像』（講談社）1990年11月  
号  
「群衆論」, 市川浩ほか編『現代哲学の冒険 10 交換と所有』岩波書店,  
1990年12月
- 1991 「ナショナリズムとカニバリズム（談話まとめ）」、『現代思想』1991年2  
月号  
「排除と差別」、『季刊 仏教』（法蔵館）第15号, 1991年4月
- 1992 「排除と差別」, 差別を考える研究会編『年報・差別問題研究1』明石書  
店, 1992年11月  
「ベンヤミンにおける歴史の概念」、『現代思想』1992年12月号
- 1993 「タイ紀行（アジア・レポート）」、『現代思想』1993年3月号  
「儀礼と暴力 —— 北タイの精霊儀礼について」, 田辺繁治編『実践宗教の  
人類学 —— 上座部仏教の世界』京都大学学術出版会, 1993年3月  
「演劇と暴力 —— 現代思想を先取りした男」, 風馬の会編『寺山修司の世  
界』情況出版, 1993年10月  
「二つの「排除」論」, 加賀野井秀一・前田秀樹・立川健二編『言語哲学の  
地平 —— 丸山圭三郎の世界』夏目書房, 1993年11月  
「解説：イスラーム経済思想の社会哲学的考察」, ムハンマド・バーキル  
ッ=サドル『イスラーム経済論』（黒田寿郎訳）未知谷, 1993年12  
月  
「新たに登場する現代哲学の設計士たち」（'93 後半 論壇の潮流）, 『エコ  
ノミスト』（毎日新聞社）1993年12月21日号
- 1994 「ベンヤミンにおける倦怠論と歴史の理念」、『思想』No.840, 1994年6月  
「咲笑する精神（追悼・廣松渉）」、『現代思想』1994年7月号  
「廣松渉の思想 —— その正と負の遺産」（'94 前半 論壇の潮流）, 『エコノ

- ミスト』1994年8月16・23日合併号  
 「解説：イスラーム社会思想の考察」, ムハンマド・バーキルッ=サドル  
 『イスラーム哲学』(黒田寿郎訳) 未知谷, 1994年4月  
 「解説：イスラーム経済の現実的意義」, ムハンマド・バーキルッ=サドル  
 『無利子銀行論』(黒田寿郎・岩井聡訳) 未知谷, 1994年12月
- 1995 「対話的公共空間の可能性」『エコノミスト』('94後半 論壇の潮流),  
 1995年1月3・10日合併号  
 「社会形成における宗教の役割」, 田辺繁治編『アジアにおける宗教の再生  
 — 宗教的経験のポリティクス』京都大学学術出版会, 1995年5月  
 「法の精神の不在という危機」('95前半 論壇の潮流), 『エコノミスト』  
 1995年8月15・22日合併号  
 「マルキシズム/ナショナリズム/コスモポリティズム—現代世界と現代  
 思想」  
 『imidas (イミダス)'96』, 集英社, 1995年12月
- 1996 「HOMO VIATOR と峠のイメージ —— 『大菩薩峠』試論」, 『比較文学  
 年誌』(早稲田大学「比較文学年誌」編集委員会編) No.32, 1996年  
 「いま, 敗者の歴史を書くべきとき」(戦後50年目の年 日本の論壇), 『エ  
 コノミスト』1996年1月2・9日合併号  
 「「交通」「所有」範疇ふたたび」, 清水泰夫(「創造の会」事務局) 編集・  
 発行『学問文芸共和国 —— 追悼平田清明』1996年3月  
 「第10巻 解説」, 『廣松渉著作集』第10巻「マルクス主義の哲学」, 岩波  
 書店, 1996年8月
- 1997 「『資本論を読む』を訳し終えて」, 『ちくま』No.313, 1997年4月号  
 「第14巻 解説」, 『廣松渉著作集』第14巻「近代の超克」, 岩波書店,  
 1997年7月
- 1998 「排除と差別 —— 正義の倫理に向けて」, 『部落解放』(解放出版社)  
 No.435, 1998年3月  
 「欲望する人間」, 『芥川龍之介全集』(岩波書店) 第24巻「月報24」,  
 1998年3月  
 「ウォーラーステインを読んで」, 『大航海』(新書館) No.21, 1998年4月  
 「人類学の認識論的諸問題」, 『現代思想』1998年6月号  
 「思想の現在とマルクス」, 『大航海』No.25, 1998年12月
- 1999 「清沢満之との出会い」, 『同朋』(東本願寺出版部) 1999年1月号  
 「現代人と余暇」, 『生活起点』(セゾン総合研究所) No.10, 1999年3月

故 今村仁司教授年譜ならびに主要著作目録

- 00年代 2000 「労働の意味を考える」, 『「会社人間」が見失ったもの —— 21世紀における日本人の生き方を探る』フジタ未来経営研究所, 2000年
- 2001 「提言 二十一世紀への心構え」, 『生活起点』No.32, 2001年1月号  
「贈与社会の『発見』」, 『学士会会報』(学士会) No.831, 2001年4月  
「ベンヤミン」(特集 写真論 —— 私の一枚), 『現代思想』2001年9月号  
「求道(フィロ=ソフィア)と智慧(仏智)の関係 —— 「驚くこと」の意味について」  
(真宗教学学会九州大会記念講演), 『真宗教学研究』No.22, 2001年11月
- 2002 「清沢満之と宗教哲学への道」, 『思想』No.943, 2002年11月号  
「解説」, 『清沢満之全集』第1巻「宗教哲学」, 岩波書店, 2002年11月
- 2003 「近代世界と環境問題」, 『生活起点』(セゾン総合研究所) No.56, 2003年1月  
「解説」, 『清沢満之全集』第3巻「哲学論集」, 岩波書店, 2003年1月  
「覚醒者の作法」, 『無限洞』(盛岡市:日野岳唯照・主宰) 第1号, 2003年2月  
「清沢満之における縁起の概念」, 『親鸞教学』(大谷大学真宗学会) No.80・81, 2003年3月  
「近代における労働の歴史と意味」(第3回日本インターンシップ学会大会概要), 『年報』(日本インターンシップ学会) No.6, 2003年3月31日  
「文字と貨幣」, 『ユリイカ』2003年4月臨時増刊号  
『資本論』を読む, 『環』(藤原書店) No.14, 2003年夏号  
「文庫解説」, 杉浦明平著『古典を読む 歎異抄』岩波現代文庫, 2003年9月
- 2004 「清沢満之の哲学」, 『無限洞』第2号, 2004年2月  
「マルクスにおける時間の概念」, 清水多吉先生古希記念論文集刊行委員会編『知の軌跡 —— 二〇世紀を顧みる』北樹出版, 2004年3月  
「マルクスにおける歴史的時間の概念」, 『現代思想』2004年4月臨時増刊号  
「言葉と暴力」, 池上良正ほか編『暴力:破壊と秩序』(『岩波講座 宗教』第8巻) 岩波書店, 2004年9月  
「清沢満之における『宗教哲学骸骨』の思想的意義〔含 質疑〕」, 『現代と親鸞』(親鸞仏教センター) No.6, 2004年9月  
「文字と貨幣」, 『文字』(京都精華大学文字文明研究所) No.5, 2004年10

月

- 「対談を終えて —— 末木教授への応答」, 『思想』 No.967, 2004 年 11 月号  
(末木文美士との対談「清沢満之と仏教の今日的再生」(同号掲載)  
を受けて)
- 2005 「エッセー (一) 凡夫とは何か」, 『無限洞』 第 3 号, 2005 年 2 月  
「日本人の労働観」(シンポジウム 2 過重労働による健康障害防止対策の  
現状と課題), 『産業衛生学雑誌』(社団法人日本産業衛生学会)  
No.47 (臨時増刊号), 2005 年 4 月  
「仏智に至る道 —— 清沢満之の求道」, 2005 年 6 月 12 日『信道講座講義  
録』(真宗大谷派名古屋別院・教化センター)  
「清沢満之研究会 清沢満之における「他力門哲学骸骨試稿」の思想的意義  
〔含 質疑〕」,  
『現代と親鸞』(親鸞仏教センター(真宗大谷派)) No.9, 2005 年 12 月
- 2006 「『日本的』 仏教の特質 (座談会導入テキスト)」, 『無限洞』 第 4 号, 2006  
年 5 月  
「エッセー (二) 本願とは何か」, 『無限洞』 第 4 号, 2006 年 5 月  
「手仕事の歴史的意味」, 『ドレストァディ』(京都服飾文化研究財団) No.50,  
2006 年 8 月  
「社会空間の理論的地平 社会空間の概念」, 西井涼子・田辺繁治編『社会  
空間の人類学 —— マテリアリティ・主体・モダニティ』, 世界思想  
社, 2006 年
- 2007 「二律背反に耐える思想 —— あれかこれかでもなく, あれもこれでもな  
く」(巻頭言), 『思想』 No.998, 2007 年 6 月号  
「本を読むこと, 生きること」, 『東京経済大学・学術研究センター年報』  
(2006 年度) No.7, 2007 年 6 月  
「フランスの社会主義」, 『哲学の歴史』 第 8 卷 (伊藤邦武責任編集「社会  
の哲学 / 18 - 20 世紀」), 中央公論新社, 2007 年 11 月



# 故今村仁司教授の思い出

村 上 勝 彦

故今村仁司教授は、昨年5月、残念ながら帰らぬ人となった。日頃近くにいた同僚をはじめ、ほとんどの人は彼の病気を知らず、突然の逝去とうけとってたいへん驚かれたことと思う。今村教授は、重い病気に罹っておられたにもかかわらず、相変わらず誰よりも早く研究室にきて、精力的に研究にとりくむという生活を続けており、彼の身に起こった変化に気づいている人は少なかった。亡くなる半年ほど前、東アジアの出版と文化に関する国際シンポジウムが本学で開催されたとき、その基調講演をひきうけ、熟成した話をされたので、そのときの姿を見ていた人びとも突然の逝去と思われたことであろう。講演で、書物とのつきあいと出会いなしには自分の人生がなかったと思う、と話されたが、すでに病気のことを聞いていた私は、「本を読むこと、生きること」というその演題の後半の言葉に妙に胸騒ぎを覚えたものである。

演題の前半の言葉、「本を読むこと」は、今村教授にとってはとくに重要な意味をもっていた。処女作である『歴史と認識』でも強調しているように、読むことはそのまま同時に理論的思惟であり、読み方の問題は認識論的問題そのものである、と考えておられたからである。私的な思い出であるが、私は院生時代、今村教授を中心とするアルチュセールやヘーゲルなどを読む会に参加させてもらい、以来親しくさせていただいた。そのこともあるので、これからは今村さんと呼びます。すでに本学に就任されていた今村さんは、当時の大学執行部に対して、強引に、『暴力のオントロジー』という今村さんのご著書があるが、なかば「暴力的に」、私を本学へ就任させるべく尽力されたと聞いている。私はまったく知らなかったことではあるが。私より3年早く着任された本学では、36年の長きにわたって教育と研究に従事されたので、同僚としての思い出は少なくない。学問的なことはこの後の専門家の諸論文にお任せして、私は学問外的なことに少しふれたい。誰もが「本当？」と疑うかもしれないが、今村さんは私たち同僚と一緒にスキー合宿に出かけたり、テニスをしたりと、スポーツにけっして無縁な人ではなかった。しかし生来の弱視のためか、スキーの滑降姿勢はかなり古典的なものであった。

とくに思い起こされるのは、1975年夏、フランスへの2年間の国外研究に出発されるとき、飛行場へ見送りにいった際に見た今村さんの出で立ちである。カバンなどをタスキにかけて、あたかもこれから戦場に向かう戦士のような姿であった。あとで思いだったが、まさに思想戦線で戦うためにフランスに出征されたのだと。三島憲一教授が、「論争的思想家の今村仁

## 故今村仁司教授の思い出

司氏が5月5日に亡くなった」と『毎日新聞』紙上で追悼されていたように、今村さんはじつに戦う思想家だった。論争相手に対する態度はきわめて厳しいものがあつた。しかし人を見抜く力は並々ならぬものがあり、これは大方の共通した見方である。フランスからの帰国談のなかでいまでも印象に残っているのは、アルチュセール学派の高弟、エチエンヌ・バリバルとのパリにおける交流についてである。たしか薄暗い部屋のなかで、政治的にもアクティブな彼と議論したことが、今村さんにとってたいへん刺激的であつたようで、彼を高く評価していた。帰国後にはさっそく、彼の著作『史的唯物論研究』の翻訳書を上梓されている。私が今村さんの帰国談で覚えているのはそれぐらいで、あとはパリの街は汚いということぐらいである。

帰国後の1980年代は、フランスのポストモダン思想の紹介者として広く知られるようになり、ポストモダンやニューアカデミズムのブームの火付け役となつたといわれている今村さんだが、ご本人は自前の思想・哲学を構築するのだという強固な信念をもっておられた。そのためか、アジアや日本への関心はきわめて強く、タイでの文化人類学調査への同行や、交換教員としての中国滞在や、後の日本仏教の研究・批判へとつながっていると思われる。今村さんは人も知る類まれな勉強家であり、締め切り日を違えないという厳格さをもち、筆も速いので、多くの著作をものにされたが、上記にかんしては、『タイで考える』、『中国で考える』、『清沢満之の哲学』などがあげられる。私も今村さんに誘われて国立民族学博物館の共同研究に参加し、東南アジアの華僑調査を数年手がけたことがあるが、今村さんの期待に沿えなかったのではないかといまも心残りである。

今村さんは、学問的に本学を代表する教授のひとりであつただけでなく、日本の哲学、社会思想における代表的な研究者のひとりであつた。そのため、逝去の報に接し、今村さんの社会と文化の理論を再把握し、その功績から学ぶ場を直ちに設けようとの声が、期せずして学内で強く起こり、昨年10月の本学主催のシンポジウム開催へと結実した。こうした形でのシンポジウム開催は、たぶん本学の歴史でも初めてのことであり、長く後世に残るものと思われるが、それは今村さんの学徳のなせるわざである。そのため、今村さんと深い交流のあつた各界を代表する方々を講師としてお迎えすることができ、また、シンポジウムには多くの方々の参加を得ることができ、たいへん意義深い場となつた。この追悼号にも、多くの先生方からご寄稿をいただくことができ、あらためて感謝申し上げたい。今村さんの信条である批判的精神をもって、今村さんの業績を再把握し、乗り越えていくことが今村さんに対する最大の供養であり、彼もそれを望んでいたことと思う。